

2018年
フランス海外スターージュ報告書

フランス語教育スターージュ運営委員会編

日本フランス語フランス文学会、日本フランス語教育学会、在日フランス大使館

本報告書は、2018 年 3 月 22 日～25 日に実施された日本フランス語フランス文学会、日本フランス語教育学会、在日フランス大使館主催のフランス語教育国内スタージュの修了者のうち、2018 年 8 月にフランス(ブザンソン)で実施された教員研修コース(CLA)に参加した方によるフランス海外スタージュの報告書です。

報告1

2018 年 7 月 30 日～8 月 9 日 夏季フランス海外研修報告書

作成者 浅見子緒

作成日 2018 年 9 月 6 日

Table des matières 目次

要約.....	4
1. フランス到着から研修前日まで.....	4
2. 初日オリエンテーション(於:Amphi Petit - UFR Lettres)	6
3. 登録したモジュールについて	8
1) Créer des activités sur Internet (フランス語学習サイトやアプリの作成) <i>Fabien Olivry</i> (12 時間)	9
2) Concevoir et animer une formation en ligne (学習用プラットフォームの構築) <i>Odile Besson</i> (12 時間)	11
3) Enseigner avec les média : radio et télévision (メディアを使った授業展開) <i>Francine Beissel</i> (12 時間)	11
4. 参加したフォーラムとアトリエについて.....	13
1) Enseigner le FLE aux enfants... De la tête aux pieds ! Approche pluri-sensorielle et sollicitation des intelligences multiples (子どもクラスでの多感覚応用アプローチと多重知性への働きかけ) <i>Hélène Vanthier</i> (2 時間)	14
2) Programmation neurolinguistique & gestion du stress (1)(2) (神経言語プログラミングとストレスへの対処 (1)(2)) <i>Jean-Christophe Delbende</i> (4 時間)	14
3) Pratiques théâtrales en classe de langue (外国語教育における演劇手法の	14
実践) <i>Jean-Christophe Delbende</i> (6 時間)	14
5. Activités Culturelles に参加した感想	15
1) ドゥ川クルーズ Balade en bateau mouche à Besançon.....	15
2) オー・ドゥ日帰り旅行 Voyage dans le Haut-Doubs	15
3) 演劇鑑賞 Conférence théâtralisée : Les Simone.....	16
4) 地方議会訪問 Visite du Conseil Régional	16
5) CLA 60 周年記念サーカス・コンサート Soirée anniversaire 60 ans du CLA : cirque et concert	17
6. ブザンソンと、近郊の街.....	17

1) ブザンソン	17
• 市内観光	17
• レストラン	18
2) ブザンソン近郊の街	19
• オルナン Ornans	19
• ロ Lods	19
• ディジョン Dijon	20
• アルケスナン王立製塩工場 Saline Royale d'Arc et Senans	20
最後に	20
Résumé de la formation pour professeurs et formateurs de FLEエラー!ブックマークが定義されていません。	

要約

2018 年 7 月 30 日から 8 月 9 日の間、ブザンソンのフランシュ＝コンテ大学付属応用言語センター (CLA, Centre de Linguistique Appliquée de Besançon) にて開催されたフランス語教育教員研修 (Formation pour professeurs et formateurs de FLE / FLS) に参加させていただいた。今年、日本からは 8 名の研修生が(うち 3 名が 7 月 30 日～8 月 9 日に、5 名が 8 月 12 日～8 月 22 日に)参加した。本研修では、3 月 21 日から 24 日の 4 日間に渡り開催された国内スタージュでの学びを踏まえ、最先端の教授法や理論に触れる機会に恵まれた。研修プログラムの概要、期間中に自身が選択したプログラムの内容と課外活動、ブザンソンと周辺地域について、ここに報告する。

1. フランス到着から研修前日まで

ブザンソンへは、研修の始まる前日 (7 月 29 日) に移動することになる。希望者は研修前々日 (7 月 28 日) にパリ Nation 駅近くの Nouvel Hôtel に宿泊することができた。朝食込み。



Nouvel Hotel の一室と、中庭の朝食会場。

シャルルドゴール空港からホテルのある Nation 駅へは、後から伺った所によるとターミナル 3 から直通路線バスが出ているそうだが、私は見つけることができず、Air France 運航の Bus Direct で Gare de Lyon まで行き、メトロ 1 番線で Nation へ移動した。

滞在期間中の生活費(給費)はターミナル 2F の Travelex で受け取るようになっていたため、預け荷物をピックアップ後、Air France の到着ターミナル 2E から 2F へ移動する必要があった。利用航空会社の到着ロビーと、給費受け取りターミナルを事前に確認しておくと便利だ。到着後 3 日以内に受け取る必要があるが、受け取り損ねた場合、CLA の Coordinatrice である Mme H       Vanthier のところへ行くようにとの指示があった。ブザンソンで受け取ることができるか否かについては定かではない。

ブザンソンへの移動日である翌日 7 月 29 日、今回一緒に参加させていただいた他の 2 名の研修生の先生方とともにチェックアウトし、Gare de Lyon から Besan     Franche-Comt     駅経由、Besan     Viotte 駅へ移動した。TGV のチケットは、日本にいたうちにフランス大使館より事前にメールでお送りいただいた。

Besan     Viotte 駅(下部写真左①)では、CLA のスタッフが待機くださっていた。滞在先アパート Z         のある Canot 駅(下部写真②)までの Tram のチケット(Ginko 社)のほか、ブザンソン市内地図や水をご用意くださった。研修初日の集合時間と場所も、ここで確認した。日曜でお店が閉まっているため、パリにいたうちに駅などで夕飯を買っておくと安心だ。

滞在先アパート Z        (下部写真③)は 19 時以降正面玄関が閉まるため、フランス大使館より事前にメールで送られる 4 桁の入館コードを必ず控えておくべきである。朝食は(私は利用しなかったが)9 ユーロで利用可能。ランドリーは 1 台のみと聞いたので、洗濯物は全て部屋で手洗いすることに(部屋干しで 1    3 日で乾いたが、ハンガーは取り外せないの、ハンガーか物干しがあればなお便利)。毎日 35 度を超える酷暑だったので、エアコンがないのは辛かったが、風通しの良い部屋だったことが幸いした。ただ、防犯上の理由と蚊がいたことから、テラスのドアはなるべく閉めるようにしていた(虫よけスプレーは必須だった)。キッチン、電子レンジ、コーヒーメーカーあり。水道水も飲めなくても、気になる場合はミネラルウォーターがより安心。V        (下部写真④)を利用すれば、重い買い物をした際も便利そう。Wifi は安定しているが、月が替わると新しいパスワードになるので受付で確認が必要。個人的に購入した Orange の 1 か月アカウントはパリの一部で接続できたもののブザンソンでは使用できなかったのが勧められない。



①Besan     Viotte 駅 ②Canot 駅と大学寮 ③Z         の一室 ④V        

2. 初日オリエンテーション(於:Amphi Petit - UFR Lettres)

通常の研修は 8 時 30 分より開始するが、初日のみ、10 時 30 分からのオリエンテーションに始まった。研修は通常、Canot にある CLA 内で行われるが、夏季はフランス語学研修が開催されるため、教室の都合上、中心部に近い UFR Lettres(文学部キャンパス)で行われた。以下はオリエンテーションの概要である。

1. 資料の配布(CLA オリジナル布トートバッグ内に格納)

Carte CLA(特定の美術館などで提示すると入場料が無料または割引となる)、研修プログラム冊子、Activités culturelle(課外活動)紹介冊子、Besançon 市内地図、Besançon CLA プラスチックコップ、USB メモリスティック、ボールペン、無地ノート(未確認だが、他の多くの研修生が使っていた)、ブザンソンに関するパンフレット、ブザンソンが登場する文献集など。

2. 参加研修生の出身国紹介

スーダン 10 名、トルコ 5 名、トーゴ 1 名、スリランカ 3 名、カザフスタン 4 名、日本 3 名、韓国 1 名、チュニジア 1 名、モロッコ 3 名、スペイン 2 名、ドイツ 1 名、コソヴォ 1 名、ウクライナ 1 名、アイルランド 1 名、レバノン 1 名、ルーマニア 1 名(計 39 名)。例年の約半数とのこと。スーダンやスリランカからの研修生は、2 クール(7 月 30 日～8 月 9 日と、8 月 12 日～8 月 22 日)参加。

3. Modules, forums, ateliers の説明と、担当教員の紹介

• Modules モジュール(必須授業)

1 限(8 時 30 分～10 時)、2 限(10 時 30 分～12 時)、3 限(13 時 30 分～15 時)が相応。事前に CLA の受講生専用サイトから、参加希望モジュールをして登録しておくことが求められていたが、すでに満席(Complet)と表示されているものが複数あり、登録できないものもあった。そのため登録していない研修生は、Coordinatrice の先生(Mme Hélène Vanthier)と相談し選ぶことになる。その際、勤務先教育施設(大学・高校など)・学習者プロフィール(年齢・職業など)・学習達成目的(会話・文法など)を加味した上で丁寧なアドバイスをくださった。なお、研修 2 日目までは登録モジュールの変更が可能。反対に、定員に達しないため開講しないものもあった。初等教育勤務の研修生からは、モジュールの内容が中等教育以上対象でありニーズに応えるものがないという声があった。それで、初等教育が専門の Mme Vanthier の授業を受けたい、という個別リクエストが受理されていた。先生のスケジュールが空いていたことが大きいと思うが、CLA の先生方の柔軟さと熱心さに感銘を受けた。

なお、以前参加した研修生によると、今回はモジュールの選択肢が少ないとのことだったが、Mme Vanthier 曰く、参加者が例年の半数にもならなかが理由とのことだった。

表 1 Modules モジュール(必須授業)時間割(背景色:今回登録したモジュール)。

教室名	B17	D03	D11	D12	D13
8 時 30 分 ～ 10 時	Créer des activités sur Internet F. Olivry		Évaluer en classe de FLE N. Poirié	Pédagogie de l'oral : favoriser les interactions en classe FLE M. Thierion	La société et la culture françaises aujourd'hui J-M Frisa

教室名	B17	D03	D11	D12	D13
10 時 30 分 ～ 12 時	Concevoir et animer formation en ligne <i>O. Besson</i>	Apprendre et enseigner la grammaire autrement <i>Denis Roy</i>	Phonétique et pratiques de classe <i>J-C Delbebde</i> <i>M. Vitorou</i>	Dynamiser la pédagogie de l'écrit <i>M. Thierion</i>	Enseigner la littérature d'aujourd'hui en classe de FLE <i>J-M Frisa</i>
13 時 30 分 ～ 15 時		Pratiquer l'écriture créative en classe de FLE <i>C. Fourvel</i>	Enseigner avec les média : radio et télévision <i>F. Beissel</i>	Méthodologie du FOS <i>M. Thierion</i>	Se perfectionner à l'oral <i>M. Vitorou</i>

- Forums フォーラム(単発型・自由参加) : 4 限(15 時 30 分～17 時)に開催。同じ週の Atelier との同時受講は不可。1 回の参加ごとに修了が認められる。人数制限が設定されているものもあるため、内容によっては指定期間内に申し込む必要がある。
- Ateliers アトリエ(シリーズ型・自由参加) : フォーラム同様、4 限(15 時 30 分～17 時)に開催。自由参加ではあるが、3 日間すべて参加した上で修了が認められる。フォーラム同様、人数制限のあるものに関しては、指定期間内に申し込む必要がある。

表 2 Forums フォーラムと Ateliers アトリエ一覧(背景色:今回登録したもの)。

	Forums フォーラム	Ateliers アトリエ
7 月 31 日	Enseigner le FLE aux enfants... De la tête aux pieds ! Approche pluri-sensorielle et sollicitation des intelligences multiples <i>Hélène Vanthier</i>	La voix, une amie à protéger <i>Mariella Vitorou</i>
	Découvrir la médiathèque <i>Alix Pelé</i>	
8 月 1 日	Programmation neurolinguistique & gestion du stress (1) <i>Jean-Christophe Delbende</i>	
8 月 2 日	Programmation neurolinguistique & gestion du stress (2) <i>Jean-Christophe Delbende</i>	
	Découvrir le Fonds Régional d'Art Contemporain de Franche-Comté / Cité des Arts <i>Noémie Lafond</i>	Pratiques théâtrales en classe de langue <i>Jean-Christophe Delbende</i>
8 月 6 日	Besançon, une ville pleine de surprises ! Parcours découverte – Le Palais Granvelle et l'histoire de Besançon <i>Pascal Brunet</i>	
	Vive la chanson francophone ! ¹ <i>Denis Roy</i>	
8 月 7 日	Besançon, une ville pleine de surprises ! Parcours découverte – La cathédrale et son quartier <i>Pascal Brunet</i>	
8 月 8 日	La démarche qualité appliquée à l'enseignement des langues <i>Benoit Olivier</i>	
	Victor Hugo, l'homme et ses combats, d'hier à aujourd'hui <i>Maison natale de Victor Hugo, Ville de Besançon</i>	

¹ 期間中に急遽、TV5 monde を題材にしたフォーラムへの変更があった。

4. Activités culturelles(課外活動)の紹介

平日の放課後に、ドゥ川クルーズ、映画鑑賞、カラオケパーティー、演劇鑑賞といったイベントの開催があった。また、研修生は Carte CLA を提示することで特定の美術館の入場料が免除 (Musée du Temps, Maison Victor Hugo, Fonds Régional d'Art Contemporain)あるいは割引 (Citadelle 8.5 ユーロ。18 時以降はより割安の入場料が適用)される。が、平日の各イベントに参加する場合、Visite 系のフォーラムに参加しない限り、これらすべてを回りきるのはスケジュール的に難しいと思われる。Citadelle 以外は 18 時閉館なので、放課後の 17 時以降に訪れることができて駆け足で見学することになる。

週末は日帰り旅行(土曜日:Strasbourg、日曜日:Le Haut-Doubs)が催行された。日本からの研修生は Le Haut-Doubs 旅行へ無料で参加させていただくことができたが、予約の段階で初めて知ったため、確認が必要である。

偶然にも私が参加した週に、ブルゴーニュ＝フランシュ＝コンテ地域議会訪問と、CLA 設立 60 周年イベント出席の機会に恵まれた。

5. その他

校内での Wifi 使用に関しては、担当者に個別に設定いただく必要がある。

モジュールの登録、フォーラムやアトリエほか各種イベントの申し込みは、それぞれの申請期間が細かく設定されているので、かなり正確にメモをとっておく必要がある。

各種受付窓口兼待合室は、Cours D という中庭に面した部屋が割り当てられていた。各種相談や申請のほか、パンフレット等の自由閲覧、コーヒーや飲料水のサービスがあり、休憩時間も自由に利用することができた。酷暑だったので、ペットボトルに水を補充させていただき非常に助かった。

研修生の出身国 3～5 か国ごとに担当教員がつく(日本の研修生は、韓国、アイルランド、スペイン、ドイツの研修生と同じ担当教員だった)。初日と最終日の放課後に、担当教員と国グループに分かれたミーティングがある。初日の会では、緊急時の連絡先の確認があったほか、街のおすすめや自転車の借り方などを知ることができた。最終日の会では、Attestation(研修修了書)を受け取ることになる。



スタージュの行われたフランシュ＝コンテ大学文学部キャンパスにて。

3. 登録したモジュールについて

どのモジュールも興味深く、その中より 3 つに決定しなければならないのが悩ましかった。最終的には、初めの 2 日間で複数受講し検討することに。初回を逃したものがあったものの、以下の 3 つのモジュールに決定した。

- 1) Créer des activités sur Internet (フランス語学習サイトやアプリの作成) *Fabien Olivry*
- 2) Concevoir et animer une formation en ligne (学習用プラットフォームの構築) *Odile Besson*
- 3) Enseigner avec les média : radio et télévision (メディアを使った教授法) *Francine Beissel*

インターネットやパソコンを使用したモジュールを登録したのは、主に 2 つの理由がある。1 つ目に、学習者が遊びやゲームを通じてフランス語に触れることで、知的好奇心が刺激されるような場を提供させていただきたいこと、2 つ目に、中高等教育機関にとどまらず、様々なプロフィール(年齢、職業、性別など)を持つ一人でも多くの学習者がフランス語学習の機会を得られるように、という願いからである。また、個人的な問題ではあるが IT の分野に苦手意識を感じており、独学で習得するのが難しいと判断したことも理由の一つだ。2 年後には小学校でもプログラミングの授業が必須となる現代社会において、IT を駆使した学習は、発展の余地のある分野であるに違いないと考える。

以下にそれぞれのモジュールの内容に触れる。

1) Créer des activités sur Internet (フランス語学習サイトやアプリの作成) *Fabien Olivry* (12 時間)

1. 概要と感想

カナダで出版されている教材 Echo 1, 2 の著者でもあり、*Tendance* の続編を執筆中という M. Fabien Olivry によるモジュール。無料学習アプリ Learningapps を使ったゲーム、学習用 netquiz を使ったディクテなどの練習問題作成を中心に、歌や動画を使ったアクティビティの作成方法を、実践とともに学ぶことができた。以下に、モジュール中に体験した各学習素材を、感想とともに紹介する。

1) 学習アプリ作成ツール

➤ Learningapps (<https://learningapps.org/>)

無料でアカウントを作成 (Google や Facebook アカウントも使用可) し、カテゴリー分け問題 (単語や発音)、QCM、読解、聴解といった練習問題がオンラインで手軽に作成できる。デザインは劣るものの、学習プラットフォーム Moodle との連携も可能で、何よりハードディスクの容量を気にする必要がないので、一番開発しやすいそうだと感じた。

➤ Netquiz (<http://netquiz.profweb.ca./app/questionnaires.php>)

オンラインでの Dictée ディクテを可能とした、唯一のネットツール。ほかに、Texte lacunaire 穴埋め、Mise en ordre 順序入替、Classement 分類、Association、Zones à identifier、QCM といった練習問題の作成ができる。ハードディスクにプラットフォームそのものをダウンロードする必要があるため、容量の観点から教育機関単位で運用していくのが望ましいようだ。Firefox での利用が推奨される。

➤ Kahoot! (<https://kahoot.com/>)

スマートホン上で、ゲーム感覚で参加できる 4 択問題。中等教育機関では授業中のスマートホンの利用を許可していない学校が多いため、より自宅学習や大学の授業に適しているかもしれない。

2) 音源、発音、語彙データバンク

- **Audio Lingua** (<https://www.audio-lingua.eu>)
ヨーロッパの言語(英語、ドイツ語、スペイン語など)による音源リソース。ネイティブのボランティアによる録音から成り、A1 から C2 にレベル分けされている。上記の Netquiz にこの音源をダウンロードしディクテ練習に応用することが可能。なお、音源編集する際は、無料波形編集ソフト Audacity (<https://www.audacityteam.org/>) が便利。音源によりレベル分けされているので DELF/DALF の受験対策にも活用できそうだ。
- **Littérature Audio** (<http://www.litteratureaudio.com/>)
文学作品の朗読した音源。ダウンロードもでき、作者からの検索も可能。ディクテ練習や穴埋め問題に活用できる。コミュニケーションとしてのフランス語学習ばかりでなく、文学作品を使った学習や文法習得に大変便利である。
- **Projet SHTOOKA** (<http://shtooka.net/>)
一言で言えば「発音辞典」。単語やフレーズを入力し言語を選択すると、その発音を聞くことのできるサイト。学習者にとって初めての単語を自主学習させる際に非常に便利。個人的には、演劇プロジェクトで学習者がセリフを作成した後(今年度は Tatoeba.org などの翻訳サイトを利用予定)、各自が自主的に発音を確認する際に導入する予定だ。
- **Dicorime** (<http://www.dicodesrimes.com/>)
韻を踏む単語を検索するためのオンライン辞書。詩を作る授業で活用できる。

3) オンライン講義

- **Université Numérique des Humanités** (<http://www.uoh.fr/>)
フランスの大学の人文学系の講義をオンラインで受講できるサイト。学習者ばかりでなく是非教員側としても受講したいものである。
- **Fun Mook** (<https://www.fun-mooc.fr/>)
フランスの大学の講義をオンラインで受講できるサイト。4 週間のコースを修了すると、証書が発行される。

4) その他便利ツール、サイト

- **Framakey** (<http://framakey.org/>)
ソフトを圧縮し、USB に入れて持ち運ぶためのツール。例えば、Audacity(波形編集ソフト)、Netquiz(学習プラットフォーム)、Avidemix(動画編集ソフト)といったソフトに活用できる。
- **Les outils TICE** (<https://outilstice.com/>)
TICE (情報教育: les Technologies de l'Information et de la Communication pour l'Enseignement) に関するノウハウの詰まった Fidel Navamuel 氏によるブログ。困ったことがあったときに参照できるように、と紹介された。
- **Framasoft** (<https://framasoft.org/>)
テキストの共同編集ツール Framapad (<https://framapad.org/>) や、マインドマップ作成ツール Framindmap (<https://framindmap.org/>) といった機能をアカウント作成後、オンラインで使用で

きる。例えばテキスト編集ツールを使って複数の学習者でひとつの物語を作成したり、マインドマップを使って語彙を増やしたりなどの使い方が検討できそうだ。

2) Concevoir et animer une formation en ligne (学習用プラットフォームの構築) *Odile Besson* (12 時間)

1. 概要

学習プラットフォーム Moodle の特徴を踏まえた上で、主にパラメータの設定方法について実践を通じ学んだ。最終日にオンライン版で各自学習プラットフォームを作成し、LMS (学習管理システム: Learning Management System) の可能性を探った。

2. 受講理由

受講されていた先生方は、Moodle を導入している、あるいは、今後導入を検討している教育機関で勤務なさっている方が多数だった。

今回私が受講した理由の一つは、私の同僚のフランス人教員が Moodle の研究をしているため、将来的に共同で教材開発をしていけたら、という想いがあったからだ。先にも述べたが、個人的に IT に明るくないため、その場で教員に質問できる環境が必要と考え受講した。

3. 特徴と課題

なぜ Moodle か。それはユーザ数が多く、細かい設定で学習過程を記録できるからである。教材の提示、課題の指示、提出物の受け取りと評価、は課題の遅延提出の場合の評価、試験の実施、成績入力など、教員と学習者間の一連のやり取りが可能で、質が高い学習を促せるとのことである。

一般的に、Moodle は各教育機関の情報の先生方が管理なさっていることが多いそうだ。なので、細かい設定などは情報担当の先生に依頼をするようになるのだが、Moodle についての多少の知識がないと、スムーズに依頼することも困難なため、実際に Moodle の設定に携わらない教員にとっても、本モジュールは有用である。

ただし、個人で管理するにはオンライン版 (<https://moodle.net/>) を使用することが望ましい。ただし、オンライン版の無料版は、できることが非常に限られるという問題点がある。

中等教育で Moodle を導入することについて、操作のできる教員の確保が課題となるため、直近では難しいように感じた。が、中高よりも学習者同士が顔を合わせることが少なく、学習者一人ひとりのスケジュールがより多様な大学では、Moodle を使った共同作業や、教員とのやり取り、自宅学習と教員によるフォローが容易になるのでは、という印象だ。

3) Enseigner avec les média : radio et télévision (メディアを使った授業展開) *Francine Beissel* (12 時間)

1. 概要

メディアと呼ばれる媒体は、紙、ラジオ、テレビなどが挙げられるが、このモジュールでは主にラジオ、テレビについて扱った。

なお、メディアごとの、授業で使いやすい媒体として、以下が紹介された。

- 紙：新聞各紙、情報誌 *Le Un*, *Les Clefs de l'actualité* (子ども向け) など。
- ラジオ：RFI, *France Culture*, *France Inter* など。
Transcription がないものに関しては、教員側で用意する必要があるので、時間がない場合は Transcription 付きのものを探すとよい。
- テレビ：TF1, F2, *Arté*, *Arté junior* (子ども向け), LCP (国会放送), *France 6* (フランス海外県のテレビ局), BMF (ニュース), LCI (ニュース), TV5, *Un jour une question*, *France TV éducation* (子ども向け)。
TV5 monde について、Mme Beissel のお考えとしては、内容も複合的で授業のニーズに合わせて「料理」しにくいことから、あまりおすすめしないとのことだった。

メディアを使った授業は、基本的に以下のステップで進めることが推奨されている。

1) Mise en route 導入

メディアを流す前に、学習者がスムーズにメディアで扱われているテーマに入りこめるよう、日常的かつ一般的な質問を投げかける。例えば、オゾン層についてのニュースを扱う場合、「今日の天気は?」「今年の夏は例年と比べてどうか?」などといった質問から話題を膨らませ深堀していく。

2) Découverte du document メディアを視聴する

テレビの場合は画像だけを流し、テーマについて簡単に想像させるなどしてもよい。

3) Compréhension globale 大まかに理解する

メディアを視聴しながら、素材のタイプ (インタビューなのか、ルポルタージュなのか、広告宣伝なのか、など)、話者の人数や性別、場所や状況などをつかむ。

4) Compréhension affinée 詳細を理解する

メディアを視聴しながら、学習目的に合わせ、全体あるいは必要な個所を掘り下げて理解させる。

5) Travail sur la langue

メディアに触れながら、または、触れた後で、語彙や表現、文法事項、発音など、学習目的に応じ取り上げる。

6) Production

メディアを視聴し、内容を理解した上で、タスクワークに取り組ませる。内容により、*Production écrite* あるいは *Production orale* を行わせる。教員はその際に、上記で扱った語彙や表現、文法事項などといった学習項目を学習者が使えるようになっているかも確認する。

2. 受講理由

外国語学習の動機の一つに、その言語で発せられる情報を理解したいと考える学習者は多く、その願望が学習のきっかけとなることもある。メディアという *Documents authentiques* を用いることは、ネイティブが日常生活で見聞きしている情報をそのまま扱うことになり、学習者の知的好奇心を刺激するばかりか、理解できたときに大きな自信を与えることになる。旬な情報に触れることは、教科書にとどまらない広い世界を見ることになり、常に新鮮な気持ちで取り組むことができると期待する。ただ、ど

のように授業で扱うべきか、授業で扱うときの準備はどのようなものかについて、漠然としたイメージしかなかったため、具体的なノウハウを学びたいと思い、本モジュールを受講した。

3. 特徴と課題

授業でメディアを扱う時に注意すべき点は、ラジオやテレビの内容を理解することが学習者の最終目的とならないようにすることだ。あくまでもメディアは特定のテーマへのとっかかりで、その内容理解は通過点に過ぎない。最終的には自らのプロジェクトに取り組み、発表することに学習効果を期待する。

レベルによって、素材を使い分けることはしない。レベルは、教員側が提案する質問やアクティビティに決定されるからである。同じ素材でも、学習者のレベルが A1-A2 の場合は QCM (選択問題) や必要箇所だけを聞き取らせる Questions de discrimination といった質問、B1 の場合は Questions semi-ouvertes (QQOCQP)、B2-C1 の場合は Questions ouvertes を用意するなど、レベルごとに異なるタイプの練習問題を用意する必要がある。

受講中、「私の国ではメディアを元に学習者に発表させるなんて、そんな自主性は期待できない(スーダン)」「話すスピードは学習者レベルに関係するので、初心者にメディアを使うのは無理がある(トルコ)」「やったことのないメディアの授業を、モジュール内で準備し発表するのは辛い(ドイツ)」「週1時間の授業で、同じメディアを扱った3か月のプロジェクトに取り組ませるのは、スケジュール的に無理(トルコ)」といったネガティブな声も聞かれたが、個人的には、学習者の意欲を信じ教員側が用意する内容を工夫することで、学習者の満足度に訴えることができそうだと前向きに捉えられた。

ただ、日本人学習者にとっても、メディアを一度聞いた段階で、話されるスピードに圧倒され、心理的に拒否してしまう学習者もいるかもしれない。帰国後、先輩の先生方にお話を伺ったところ、現代の中高生は割とリラックスし、たとえスピードが速くても聞き取れる部分だけ聞こうとする、良い意味で完璧主義でない傾向がある、ということだった。なので、メディアを利用することに躊躇する必要はないと安心した。

なお、最終日は Mme Beissel のご都合がつかないとのことで、90分授業の分を6日間、15分ずつ授業を延長していただいた。

4. 参加したフォーラムとアトリエについて

主に教授法や教室内アクティビティに関するフォーラム、アトリエを受講した。

- 1) Enseigner le FLE aux enfants... De la tête aux pieds ! Approche pluri-sensorielle et sollicitation des intelligences multiples (子どもクラスでの多感覚応用アプローチと多重知性への働きかけ) *Hélène Vanthier* (2時間)
- 2) Programmation neurolinguistique & gestion du stress (1)(2) (神経言語プログラミングとストレスへの対処 (1)(2)) *Jean-Christophe Delbende* (4時間)
- 3) Pratiques théâtrales en classe de langue (外国語教育における演劇実践) *Jean-Christophe Delbende* (6時間)

1) Enseigner le FLE aux enfants... De la tête aux pieds ! Approche pluri-sensorielle et sollicitation des intelligences multiples (子どもクラスでの多感覚応用アプローチと多重知性への働きかけ) *Hélène Vanthier* (2 時間)

本スタージュの Coordinatrice で、子ども向け教材 Zig Zag の著者でもある Mme Hélène Vanthier によるフォーラム。Mme Vanthier によるドイツ語の色のレッスンを通じ、学習者がどのように単語の発音を習得し、意味を理解し、定着の確認を図るか、体験させていただいた。初めての音を耳にする心理的ストレスもあったが、Verbotonale 法によって正確な発音が身に着いたことの自信、文脈から知っている単語を拾い上げ理解しようとする模索作業、習得した語彙を駆使したゲームは五感に訴えかけるので、小学生はもちろん、中高生や学生、大人でも楽しく取り組める教授法だ。

2) Programmation neurolinguistique & gestion du stress (1)(2) (神経言語プログラミングとストレスへの対処 (1)(2)) *Jean-Christophe Delbende* (4 時間)

学習者も教員も、授業内でも様々なストレスにさらされる。両者にとって、人前に話すことの負担があるか、学習者にとっては、発言した際の教員のネガティブな反応から覚える恥ずかしさ。教員にとっては、居眠りをする学習者を見つけてしまった際のショックと授業内容がつまらないのではないかという不安。

ストレスの多くは、偏った情報によるものが多い。たまたま見聞きしてしまった一部の情報だけに捉われない冷静さと客観性の保ち方や、不安の吐き出し方、過去の成功体験から心理状態を回復させる方法を伝授いただいた。具体的な感情を互いに共有しながら、主観的に捉えてしまった部分を見つめなおす方法を繰り返すことで、腑に落ちてくるものだ。

3) Pratiques théâtrales en classe de langue (外国語教育における演劇手法の実践) *Jean-Christophe Delbende* (6 時間)

勝手にクラスの雰囲気や和んでしまう、真っ先に人前に立って話したくなる、喜怒哀楽の感情をたっぷり込めて発言してしまう。そんな魔法を、演劇テクニックの実践を通じ体感できるアトリエだった。3 回に及び「遊び」に入りこむことで自然と感情がついてくる。まず、M.Delbende が見本を見せてくれるので、演技に自信がなくても安心して参加できる内容だった。

当初、中高での演劇プロジェクトの進め方について学べるものと期待し履修した。が、実際は、どのようにして人前に出る勇気ができるか、どうしたら喜怒哀楽を表現できるか、といった演技テクニックについて扱ったため、堂々と人前に立てそうな点や、内気な生徒がいた場合にクラス全体で行えるウォームアップとして活用できそうな点はよかった。

5. Activités Culturelles に参加した感想

1) ドゥ川クルーズ Balade en bateau mouche à Besançon

授業後、18時に直接船乗り場まで行くか、17時半頃 CLA で集合しスタッフと一緒に船乗り場まで歩いて移動(CLA から徒歩 10 分)。手動で水車を回し水位を調整する様子や、ブザンソンの中心を U の字で囲む Doubs 川から眺める街の景色は印象深く、川から見上げる Citadelle(写真)も格別だった。



2) オー・ドゥ日帰り旅行 Voyage dans le Haut-Doubs

Le Haut-Doubs は、ドゥ川上流のスイス国境付近の地域である。はじめに、Château de Joux を訪問した。ブザンソンの Citadelle を設計したことでも知られる軍事建築士 Vauban により設計された城塞である。螺旋階段やフランスで最も深い井戸は、足がすくむものだった。城内は少し肌寒いため、羽織るものがあるとよい。

Auberge Franc-Comtois にてフランシュ＝コンテ郷土料理の昼食。クリュディテ、グラタン・ドフィノワ、七面鳥のクリーム煮、チーズ(コンテ、モルビエ)、ガトー・ドゥ・メナーージュ (le toutché とも)を、地元のリンゴジュースやワインとともにいただいた。



昼食後、船乗り場までバスで移動し、約 1 時間の Doubs 川クルーズ (Balade en Vedette panoramique du Saut du Doubs) に乗船。人や動物の頭を彷彿とさせる断崖と、その合間を流れる紆余曲折した広大な川(下部写真①)は、ベトナムのハロン湾を思わせる。

クルーズの目的地は le Saut du Doubs 滝(スイス側に位置、下部写真②)である。その手前には、スイス側へ行ける橋もあるので、記念にスイスの土を踏むのもよい。今年は酷暑と降水量不足から、滝の勢いは感じられず、川は乾いた岩肌を見せるのみであったが、コソヴォの研修生が「黒い川」と題し、画家の弟に絵を描かせよう」と、言っていたのが印象的だった。

長距離バスでの移動となるため、必要ならバス酔い対策が有効だ。私は事前に酔い止めを服用していたので、車中の睡眠で平日の暑さによる疲れをとることができた。また、持ち歩いていたハッカ油は、バス酔いのほか熱中症にも有効だったので、香りが苦手でなければおすすめてほしい(酔い止めを飲み忘れた辛そうなモロッコ人研修生に感謝された。ちなみにモロッコでは、酔い止めにレモン油を使うと教えていただいたこと、スーダンで一般的なバラの香水を分けていただいたことなど、香りに関するちょっとした交流ができたことも印象的である)。地元の cola artisanal も美味(下部写真③)。



①Saut du Doubs クルーズ ②Saut du Doubs ③Cola artisanal

3) 演劇鑑賞 Conférence théâtralisée : Les Simone

文学部キャンパスのそばにある Petit Kursaal にて開催(映画もここで上映される)。

3人からなる Compagnie Va Savoir pourquoi 劇団によるコメディを鑑賞。男女の違いをテーマにした、ウィットに富んだ展開と、観客から突如として起こるブーイングと激しい議論に、始終目が離せずにいた...

4) 地方議会訪問 Visite du Conseil Régional

2016年にブルゴーニュ地方とフランシュ=コンテ地方が統合し、ブルゴーニュ=フランシュ=コンテ地域圏になった。首府はディジョンだが、政治的な決定はブザンソンにある地方議会で行われる。今回、世界各国から CLA のフランス語教育研修に参加した研修生が招待をいただき、女性議員の方による地域圏の紹介や、国際地方として世界各国からフランス語教員を受け入れている実績や今後の展望についてのスピーチに同席させていただけたことは、大変光栄かつ貴重な経験であった。



チャペルだった建物を改造した地方議会。

5) CLA 60 周年記念サーカス・コンサート Soirée anniversaire 60 ans du CLA : cirque et concert

CLA は今年で創立 60 周年を迎えたそう。運よく、研修最終日が記念イベントの開催日と重なり、ブザンソン国立種馬牧場を訪問後、馬によるサーカスを楽しむ機会に恵まれた(その後、コンサートとダンスパーティーも行われたが、すでに 22 時を回り疲れていたので帰宅した)。スタージュの締めくくりにふさわしい、大変刺激的なタベだった。



ブザンソン国立種馬牧場にて。

6. ブザンソンと、近郊の街

ここからは個人的に訪れた場所をご紹介します。今回の研修に参加させていただかなければ、訪れることもできなかっただろう。

1) ブザンソン

- 市内観光

Carte CLA を利用し、フーコの振り子のある Musée du Temps (時の博物館、下部写真①)、Maison natale de Victor Hugo (ユゴーの生家、下部写真②)、Citadelle を見学した。いずれも閉館時間が 18

時(Citadelle は 19 時)なので、授業後に行く場合は急がねばならない。Cathédrale St.Jean 地区は、Porte Noire(下部写真④)や野外劇場といったローマ時代の名残に触れることができ圧巻だ。



①時計産業の盛んなブザンソンならではの時の博物館 ②左にユゴーの生家、右に映画を発明したリュミエール兄弟の生家が ③ローマ時代に建てられた凱旋門、Porte Noire



Place du Marché を走るトラム、Doubs 川。Doubs 川は水難の恐れがあるため遊泳禁止。

- レストラン

フランシュ＝コンテ出身の同僚が、事前におすすめのレストランを教えてくれた。

- Brasserie 1802: (下部写真①)少しおしゃれして行くようなレストラン。今回スタージュのあった文学部からすぐの場所にあってだけに、行く機会を逃した。評判が良いので、次回機会があれば真っ先に訪れたい。
- La Plancha: (下部写真②)フランス南西部料理のレストラン。プランシャと呼ばれる鉄板で、粗塩を付けた生の肉を焼くシンプルな料理。付け合わせは温野菜が選べるのでヘルシー。
- Le Coucou: 中心部にあるこじんまりとした郷土料理の美味しいレストランだそう。夜のみ営業。こちらも行けなかったもので、次回の楽しみにしておきたい。

ほかに、Brasserie 1802 向かいのビストロも、CLA の先生におすすめいただいた。酷暑の中 Canot にある Restaurant universitaire(1 食 6 ユーロ)まで歩くより、近場のビストロ(ランチ 8 ユーロ〜)や、サンドイッチ店のテイクアウト(5 ユーロ〜)を利用した方が合理的に感じた。

また、市内中心の Monoprix にはほぼ毎日お世話になっていた。熱中症対策に、セルフサービスの生オレンジジュースを毎日欠かさないようにしたところ、疲れも取れ効果があったように感じる。



①Brasserie 1802 ②La Plancha ③地元の Cancoillote チーズと Morteau ソーセージ

2) ブザンソン近郊の街

午前授業だった金曜日の午後や土曜日を利用し、近郊の街を訪れることができた。

- オルナン Ornans

画家クールベ生誕の地。川に反射する家並みが美しいことでも知られているらしい(下部写真①)。クールベ美術館も必見。観光客が多く、Tabac では日本向けハガキ切手(1.3 ユーロ)もたやすく入手できた。Besançon から電車で日帰りで行けるが、電車の本数が少ないわりに、半日で見終わってしまう。私は幸いにも他の国の研修生のホストファミリーのご親切に甘え、車で連れて行っていただいたので、時間を有効に使うことができありがたかった。

- ロ Lods

ブザンソンから 45 キロ南に位置しフランスで最も美しい村に登録されている、Loue 川(下部写真②)沿いの小さな村(下部写真③)。オルナンに行く途中、友人のホストファミリーに連れて行っていただいた。中世の教会と家々の佇まいが絵画のようで、画家たちが好んで描いたことに納得(写真④)



上：①オルナン ②ルー川ほとりはマス釣りが盛ん。下：③ロ ④ロ村の家

- デイジョン Dijon

Besançon から電車で 1 時間。往復ともに本数もあるので安心して日帰り旅行ができた。見るものが多く最終的に 10 時間滞在したことを思うと、終日空いていた土曜日に出かけたのは正解だった。



上: パンデピス店 Mulot et Petitjean、帽子店、Palais des ducs (旧ブルゴーニュ公宮殿)。

下: 木組みの家並み、ブルゴーニュ生活博物館。

- アルケスナン王立製塩工場 Saline Royale d'Arc et Senans

今回は訪れなかったのだが、もともと興味があり先生方の強い勧めもあったので、ここに載せておく。ルイ 14 世の命で円形の製塩所の建設が予定されていたが、予算上の理由から半分が出来上がった時点で建設が中断。ユネスコの世界遺産にも登録されている。ブザンソンから日帰りで行ける距離だが、電車の本数が少ないため今回は訪問を断念した。

最後に

フランス語教育で定評のある CLA での教員研修への参加をご支援くださったフランス大使館、フランス文学学会、フランス語教育学会はじめ関係者の皆様へ、心より感謝を申し上げたい。教授法に関し、充実したプログラムを通じて学ばせていただけたばかりでなく、一緒に参加した各国からの研修生の先生方、熱心な教官の先生方との出会いに恵まれたことは一生の財産となった。フランシュ＝コンテ地方を訪れたのは初めてだったが、まだ見ぬ土地へ足を踏み入れ、文化に触れ歴史に思いを馳せることができたのも、本研修あつてのことだった。今回の研修で得た経験を、今後フランス語教育に大いに活かせるよう、日々の試行錯誤を繰り返しながら、尽力し貢献したいと考える。

報告2

ブザンソン・フランス語教員スタージュ報告

はじめに

2018年8月13日から24日にかけてブザンソンで開かれたフランス語教員スタージュに参加した。本スタージュはCLA（Centre de linguistique appliquée：フランシュ・コンテ大学付属語学センター）によって主催されたものだが、スタージュ自体はフランシュ・コンテ大学で行われる。

スタージュは三つのModuleとAtelierあるいはForumから構成される。参加者はまず三つのModuleを選択しなければならない。スタージュは8日間に渡って行なわれるが、8:30から15:00にかけて、一コマ90分のModuleを三つ計8回受講することが求められる。それに加えて、参加者は三日連続で行なわれるAtelierか、あるいは最低3つ以上のForumを受けなくてはならない。Forum自体は全部で7つ用意されている。AtelierあるいはForumはModuleの終了後、15:30から17:00に開かれる。

Modules

私が受けたModuleは下記の三つである。どのModuleを選択するかは、事前にインターネット上で登録が可能であるが、ブザンソンに来てから直接スタッフに頼んでも問題ない。しかし、人気のあるModuleは定員が埋まり、受講できない可能性もある。また、実際にModuleを受けた後に変更することも早い内であれば可能である。以下、それぞれについて詳述する。

1. Enseigner la phonétique par le rythme et le mouvement, R. Llorca

日本人は概してオーラルに苦手意識があり、私個人も自信があるとはいえない。話す・聞く能力をどのように教えればいいのか、ぜひ学びたいという気持ちが強くあった。そこでブザンソン・スタージュにおいてもオーラルに関するModuleを優先的に選択した。

日本の伝統的文法教育ではどうしてもオーラルは軽視されがちである。このModuleではオーラルをリズムと動きによって教えるという非常に興味深い手法が提示された。そもそも日本人は語学というと机に座って文法を学ぶという方法に慣れ切ってしまっているが、本Moduleに接して、語学を学ぶ方法論はもっと自由で可能性があるものだと気づかされた。

第一に、リズムの問題である。講義の最初、Llorca 先生はステップを踏みながら自分の名前を発音することを受講者に促した。発音とステップを連動させて、フランス語のイントネーションやリズム、アクセントに親しむのが目的である。Llorca 先生の手法は基本的に、まず自分が手本を見せて、それを順次学習者に実践させるというものである。はじめは戸惑うがすぐに学習者は慣れる。

重要な点は、私たち日本人話者はこの手のステップやリズムで発声することが苦手なのではないかと思わされたことである。たとえば、本ステージではアフリカ圏の参加者が多く、アラビア語などを母語とする彼らは、私たち日本人がフランス語の発音に日本人特有の苦手な部分や日本語話者としてのイントネーションの癖を持っているのと同様に、彼らもまた特有の癖を持っている。しかし、実際の会話や発声に関しては、彼らは実に巧みにこなすということに気づいた。もちろん、これは人それぞれであり、オーラルの学習の蓄積などにも影響することであろうが、本 Module で日本人参加者が、私もそうなのであるが、ステップを踏んで発声するということがどうしても上手く行かなかった。また、日本語というのはステップを踏みながら、リズムに合わせて発声する言語ではないのではないかという感想も持った。無論、これは日本語とはどういう言語かという問題に絡んでくるので迂闊にはいえないし、また当然ながら優劣の問題ではない。しかし、日本語話者が特にフランス語のリズムとイントネーション、アクセントといった点に苦手意識があるといえるのではないだろうか。それを是正するためには運動という要素を取り入れた本 Module の手法は実に興味深く思われた。その際、動きだけではなく、音楽を積極的に活用することもまた有益であろう。

2. Enseigner dans une perspective interculturelle, Caroline Langer

語学学習は必然的に異文化を学ぶことでもある。本 Module ではグローバリゼーションの重要性がいや増した昨今において、他文化と共生するためには何が必要か、また文化とは何かといった文化論が主に教授された。Langer 先生は日本で数年間フランス語を教えた経験があり、日本文化について造詣が深く、また日本人のフランス語学習者の特徴や問題点についても詳しく、その話は参考になる点が多かった。

この Module に参加したのは、日本人以外ではスーダン人とエジプト人で、国籍が偏ったのが少し残念ではあった。だが、私個人としては、今までほとんど接点を持てなかったスーダンやエジプトの文化的特色を知ることができたという点で有意義だった。特に興味深かったのは、各国がそれぞれの国に対して持つステレオタイプ、いわゆる偏見を出し合うというもので、これは国や文化が持つイメージの強さや、ある種の滑稽さを浮き彫りにする意図を持っていた。日本ではフランス語教育といっても日本人が日本人に教授する形が一般的であり、どうしても他文化を学ぶという要素が希薄である。しかし、フランス語は広い世界を知るためのツールとなり得るのであり、その点を今後、実際の自分の授業において学習者たちに伝えることができればと思った。

3. Se perfectionner à l'oral, Caroline Langer

本 Module もまたオーラルに主眼を置いたものであるが、ここで重視されたのは第一にフランス語を話すことである。一例として、参加者は各自が詩なりシャンソンなりの一節を暗記し、教室で暗唱することが求められた。また、フランス語のスペルと発音の乖離について、たとえば早口言葉で覚える方法が提示された。中でも興味深かったのは無声映画のセリフを

即興で考え、演じるというものである。まず参加者は3分程度の短い無声映画を鑑賞する。その後、各自が演じる役割を決め、セリフを考え、アフレコを行う。次にセリフを即興で考え、演じる。これは大変難しいが、しかし実におもしろい訓練であると感じた。何よりもフランス語でセリフを考え、それを映像に合わせることはフランス語を話すための有効な練習法でないかという印象を持った。

これは本 Module に限ったことではないが、スタージュ全体の傾向として YouTube など映像を有効にフランス語学習に使うという意図が見られた点は興味深い。フランスのシャンソンなどを授業で活用すれば、日本人のオーラルへの苦手意識は大分改善されるのではないだろうか。

また Langer 先生はストレスやプレッシャーというメンタル面の問題も重要視していた点は注意しなければならない。本 Module では学習者がフランス語を話せないのはなぜか、話せないとしたらそれにはどのような理由があり、それはどのような方法で改善されるのかといった点が講義された。興味深いのは、学習者がフランス語を話せないのは必ずしもフランス語ができないからではないという点である。たとえば、大勢の前で何かを話さなければならないという状況は大変なストレスになるであろう。言葉を話す際に起こり得るストレスをどのようにすれば和らげることができるのか、そういった点まで語学学習は気を配らねばならないと考えさせられた。

Forums

私は計6つの Forum に参加した。Forum の内容は、CLA のメディアテークを見学し、フランス語教育における ICT の活用の現状や教科書・参考書の解説、また近隣の美術館や博物館の見学が行われた。特に印象に残ったものとして、大学近くのブザンソンの街並みの見学を挙げたい。ブザンソンで現在も使われている多くの建物が十七世紀や十八世紀に作られたものであること、その見分け方や街の歴史などを詳細に説明してもらった。知識で知っていても、実際に街の様子に触れながら建築物の解説を聞くことは得難い経験であった。

その他

スタージュにはいくつかのエクスカージョンが用意されている。私は Haut-Doubs への小旅行に参加した。Haut-Doubs はスイスとの国境近くに位置し、交通が不便であり、このような機会でないとならず赴くことがないと思われる場所である。Citadelle の見学や遊覧船に乗る経験など興味にあふれていた。

またスタージュ参加者や語学研修を受けている学生たちによる Fête が開催された。今回、日本人スタージュ参加者は時代劇をパロディにした小芝居を演じた。多くの参加者が歌やダンスを行っていたので、小芝居はそれなりにインパクトがあったのではないと思う。

参加者

参加者の国籍は、南アフリカ、エジプト、スーダン、アンゴラ、セネガル、スペイン、アイルランド、モロッコ、トルコ、スリランカ、日本であった。アフリカ圏からの参加者、特

にスーダン人が多く、アジアからの参加者が少ないのが印象的であった。世界各国のフランス語教員と知り合える機会は貴重であり、このスタージュに参加する大きな意義だと感じた。

まとめ

ブザンソンは風光明媚かつ、時間博物館やユゴー記念館など歴史を感じさせる施設が多い大変興味深く楽しい街だった。二週間のスタージュを過ごす上では恵まれた場所であると感じる。ただスタージュのスケジュールがタイトなため、ゆっくり街を過ごす時間を取るのが難しいのが惜しまれる点であった。

八日間の密度の濃い研修と何より世界の様々な国のフランス語教員の人々との交流は貴重な経験であり、多くの人にブザンソン・スタージュを経験してもらえればと思う。今後のフランス語教員としてどのようにフランス語を教えていくか、その指針を得ることができるだろう。

報告3

2018 年夏季ブザンソン教員研修報告書（後期：8 月 13 日～24 日）

石川 学

ブザンソン・フランシュ＝コンテ大学応用言語学センター（Centre de linguistique appliquée, CLA）での二週間の教員研修では、フランス語教授法の鍛錬という主要な目的面に留まらず、フランス語圏／非フランス語圏といった各国固有の言語使用状況に即した教授への意識の導入、多地域にわたるフランス語教員の親睦とネットワーク形成といった面において、かけがえのない収穫を得ることができた。以下、その概要を報告し、所見を述べる。

研修初日の朝、全体のスケジュールや履修登録の方法等に関するオリエンテーションが行われた。ここで初顔合わせとなった教員研修生たちの国籍は多様で、アイルランド、アンゴラ、エジプト、スーダン、スペイン、スリランカ、トーゴ、トルコ、日本、南アフリカ、モロッコと列挙できるが、なかでもスーダンからの参加者が多かった。夏季研修は二週間を一クールとして二クール開講され、通常は一方のみの参加となるのだが、スーダンからの参加者は二クール目の継続参加であり、これまで授業の様子などを彼ら／彼女らから聞くことができた。授業は、**module** と **forum** ならびに **atelier** の三つがある。**module** は、特定のテーマに関して同一の教員が毎日継続して行う授業であり、一日三コマの受講が必須となっている。**Forum** は、一回完結型の授業が毎回テーマと教員を変えて行われるもので、学内での座学もあれば、外部を見学する形式もある。**Atelier** は三日間計三コマで完結する授業であり、開講されるのは一種類のみである。**Forum** と **Atelier** に関しては、各人は双方合わせて計三コマの受講が最低要件となっている。すなわち、**Forum** からいずれか三つを選んで受講すれば要件を満たせるし、**Atelier** であればこれを三日間すべて受講すればよい。実際には、最低要件にとらわれず、関心のある **Forum** すべてに進んで参加する者が多かったようだ（なお、受講した授業の題目と時間数が、修了時に手渡される **Attestation** に記載される）。私は三つの **module** のほか、四つの **Forum** に参加した。下記がその題目と内容である。

○Module

8h30-10h00 : « Apprendre et enseigner la grammaire autrement », Caroline Langer

教師が一方向的に説明する形式になりがちな文法の講義を、いかに別の仕方（*autrement*）、学生主体の学びに結びつけていくのかを、様々なアクティビティの実践を通じて考えていく内容の **module** である。ゲームやジャンソンの聴き取りといった活動をグループで行わせ、ねらいとする文法事項を用いて学生が発話するように促し、必要に応じてそれを訂正する（あるいは学生同士で訂正させる）、という仕方での参加型の文法学習を複数体験することができた。参加者には模擬授業の実施が課され、PowerPoint やインターネット画像等を駆使した工夫ある授業を試みる者がいる一方で、教育現場の PC 環境が十分でない想定のもと、いかに魅力ある授業を行うかに注力する参加者がいた。

10h30-12h00 : « Favoriser les pratiques créatives et ludiques en classe de FLE », Régine Llorca

rebus や homophonie など、フランス語特有の発音要素にまつわる遊びに注目し、なおかつ、そうした遊びに身体運動をかけあわせ、参加者にフランス語発音を全身感覚を通して学ばせることに主眼を置いた module である。参加者はしばしば、特定のリズムに合わせ、ステップを踏みながら文章表現を試みなければならない。フラメンコの教員歴のある師によるダイナミックな動きに難なくついていく者、奇矯な様子になる者と様々であったが、学生に口先だけでなく、全身を使わせてフランス語発音を体得させる企ては私にとって未知のものであり、貴重な経験であった。

13h30-15h00 : « Pédagogie de l'oral : Favoriser les interactions en classe de FLE », Marie Thierion

ヨーロッパ言語共通参照枠（CECRL）が定めるレベルとそれに即した学習事項を踏まえ、あるアクティビティ課題のレベルは何か、その objectif pragmatique は何で、objectif linguistique は何か、といったことをグループワークを通じて解析し、その解析結果をもとに、今度は自分たちで任意のレベルのアクティビティを創作していく内容の module である。学生のレベルに適したアクティビティを導入するために意識すべき事項を実践のなかで学ぶことができたのは非常に有用であった。参加者間のグループワークにおける議論も熱のこもったものとなり、それ自体としても有益であった。

○Forum (15h30-17h00)

« Découvrir la médiathèque du CLA et ses ressources », Alix Pelé

CLA のメディアライブラリーを案内していただき、資料調査の方法をご教示いただくとともに、実際に陳列されている資料についての説明をいただいた。FLE 関連教材や刊行物、音声資料等の所蔵が豊かで、時間が許せばぜひとも活用したいものであった。

« Découvrir le Fonds Régional d'Art Contemporain de Franche-Comté / Cité des Arts », Noémie Lafond

所蔵されている現代芸術作品もさることながら、隈研吾氏の設計による、かつてのレンガ倉庫を作り直した美術館の建築そのもの（これは芸術文化センター（Cité des Arts）の一部であり、同じく氏の設計による音楽ホールなどが併設されている）に圧倒された。

« Victor Hugo, l'homme et ses combats, d'hier aujourd'hui », Arlette Burgy-Poiffaut

ブザンソンの中心街にあるヴィクトル・ユゴーの生家（現在はユゴー記念館となっている）を訪問し、文学者かつ政治家として唯一無二の存在であるユゴーの事績についてレクチャーをいただいた。

« Parcours découverte : Besançon, une ville pleine de surprises ! », Pascal Brunet

ブザンソン出身の建築史家である Brunet 氏に伴われ、実際に市内を歩きながら、街並みや建造物、モニュメント等に窺われる歴史的背景についてレクチャーをいただいた。解説なしでは知り得ない細やかな情報を通して、フランス以前から以後へと連なる市の歴史の一端を感得できるような心持ちがし、たいへん興味深かった。

研修期間中は、これらの授業のほかに、多様な *Activités culturelles* が CLA によって準備されていた。コンサートやスペクタクル、映画の上映がしばしば催され、さらには、手頃な値段でのエクスカージョンのプログラムが組まれていた。私は Le Haut-Doubs へのエクスカージョンに参加したが、これは本来 60 ユーロのところ、大使館のご厚意により、日本からの参加者は個人負担なしにこの旅行を享受することができた。Joux 城のガイド付きツアー、「Auberge Franc-Comtoise」での地元料理、Villers-le-Lac でのバトー・ムーシュ等、非常に充実したものであった。お取り計らいに心より御礼申し上げたい。さらに報告すべきは、毎年恒例だという *Soirée internationale* に、他の日本人研修生とともに参加したことである。これは、CLA の各国の夏季研修生が、ブザンソンの市民を観客として、それぞれの国の文化を紹介する出し物を行うという趣旨のもので、私たちはテレビ番組「水戸黄門」にアイデアを借りた時代劇ふうの寸劇を披露した。準備期間が少なく、直前のリハーサルでの無様さに色を失った私たちは、その危機感をもとに急遽練習を重ね（あるいは失敗への覚悟を決め）、結果として本番ではそれなりの声援（？）をいただいた。他の国の出し物は、伝統的なものから現代的なものまで様々で、細かなことに必ずしもこだわらず、全員で盛り上がることもできた。大変緊張したが、またとない高揚のひとつときであった。

研修総体を振り返れば、冒頭に述べたように、フランス語教授法の鍛錬という面で貴重な経験を得られただけでなく、多様な政治・経済・文化状況のもとでフランス語教育に携わっている各国の研修生と交流を深められたことが実に意義深かった。教育の場における PC 環境の有無といったこともそうだが、クラス（教員を含む）の性が一律に限定されている状況下での教育など、日本国内にはなかなか思い至らないだろう。日本でのフランス語教育は大学が主要な場だが、少年少女を対象とした教育に携わる教員が多数であることも、これまで意識しなかった点であった。各国でのフランス語の立場に応じ、様々な教育があり、様々な解決課題がある。日々それを担う多様な参加者が交わりながら、教授法の精錬に向けて議論を交わし、今後のネットワークを築いていく機会というのは、どれほど豊かなことだろう。このような機会を与えてくださり、多大なご支援をくださったフランス大使館の皆様、日本フランス語フランス文学会の皆様、日本フランス語教育学会の皆様、CLA の講師とスタッフの皆様に、衷心より御礼申し上げます。

報告 4

2018 年フランス語教育海外スタージュ報告書

木内 堯

はじめに

2018 年 7 月 30 日から 8 月 9 日にかけて、フランシュ=コンテ大学応用言語学センターで開催されたフランス語教員研修に参加した。研修のプログラムはどれも興味深いものばかりであり、世界各国から集まった仲間たちに囲まれて、とても充実した日々を過ごすことができた。

本報告書では、「*Enseigner la littérature en classe de français langue étrangère et seconde*」と題する「モジュール」について、詳しく紹介することにしたい。というのは、私が参加した研修のプログラムの中で、個人的にはこの「モジュール」が最も刺激的なものであったからだ。

« *Enseigner la littérature en classe de français langue étrangère et seconde* » について

タイトルが示す通り、「フランス語の授業において文学をどのように教えるのか」をテーマとしたモジュールである。講師は、Jean-Marie Frisa 氏。気さくでユーモア溢れる人柄が魅力的であった。このモジュール以外にも、「*La société et la culture françaises aujourd'hui*」と題するモジュールを担当していた。受講者の人数は私も含めて計 6 名。比較的少人数のクラスであったが、その分、発言する機会に多く恵まれたのは良かった。受講者の内訳は、トルコ人 2 名、スーダン人 2 名、モロッコ人 1 名、日本人 1 名だった。

授業では、原則として、毎回異なる作家の小説を 1 作品ずつ取り上げた。以下がこのモジュールで取り上げられた小説のリストである。

Annie Ernaux, *Les Années*, Gallimard, 2008.

Anna Gavalda, *L'Échappée belle*, France Loisirs, 2001.

Alice Ferney, *Les Bourgeois*, Actes Sud, 2017.

Olivier Adam, *Les Lisières*, Flammarion, 2012.

Erik Orsenna, *L'Entreprise des Indes*, Stock / Fayard, 2010.

Isabelle Monnin, *Les Gens dans l'enveloppe*, JC Lattès, 2015.

Maylis de Kerangal, *Réparer les vivants*, Verticales, 2014.

David Foenkinos, *Charlotte*, Gallimard, 2014.

すべて未邦訳の小説であり、私自身も読んだことのない作品ばかりであった。毎回の授業で未知のテキストを新たに発見できることが、このモジュールの何よりの楽しみであった。

刊行年を見ればすぐにわかるように、いずれの作品も今世紀に入ってから発表されたものである。そのこと以外にも、このモジュールで取り上げられた作品には、いくつかの共通点があったように思われる。第一に、フランスで一定の評価を得ているか、何かしらの形で話題になった作品であること。第二に、フランスの社会やヨーロッパの歴史を、直接的あるいは間接的に、描いた作品であること。第三に、比較的平易なフランス語で書かれた作品であること。以上3つの条件を満たしていることが、フランス語の授業で取り上げるのにふさわしい文学作品の条件であると、ひとまずは言えそうだ。

では、これらの作品をフランス語の授業で取り上げるには、いったいどのような方法を取ればいいのか。以下、このモジュールで実践されたアクティビティのうち、印象に残ったものを3つ紹介する。

1つ目のアクティビティは、取り上げる文学作品に関連するテレビ番組やラジオ番組を視聴した上で、聞き取った内容を報告し合うというもの。このモジュールで最も頻繁に行われたアクティビティであると言っていいかもしれない。Alice Ferney が出演するテレビ番組を見たり、Olivier Adam の小説を紹介したラジオ番組を聞いたり、David Foerkinos のインタビューを YouTube で見たりと、教材には事欠かないという印象を受けた。現代作家の作品を授業で取り上げる利点のひとつは、作家の対談やインタビューをインターネットで気軽に視聴できるということだろう。また、授業で文学作品を取り上げると、どうしても「読む」ことが中心となってしまうので、「聞く」練習を導入して学習内容のバランスを取るという意味でも、効果的なアクティビティであったと思う。

2つ目のアクティビティは、ある作家の小説のタイトルの一覧とそれぞれの小説の内容紹介に目を通し（小説のタイトルと内容紹介は別々に提示されている）、どのタイトルがどの内容紹介に一致するのかを、推測するというもの。Alice Ferney の小説を取り上げた際に行ったアクティビティである。このアクティビティは、「現代フランス文学を代表する作品」などといった括りで行うことも可能であろう。

3つ目のアクティビティは、センテンスごとに区切ってばらばらに並べられた小説の一節を、論理的に一貫性を持った順序になるように並び替えるというもの（必ずしも本来の順序と同じである必要はない）。David Foerkinos の *Charlotte* の一節を題材として行ったアクティビティである。単に論理的な思考力を要するだけでなく、文章のリズムというものについて考えさせられるアクティビティであった。

これら以外にも、ゲーム感覚で取り組めるアクティビティをいくつか行った。その中にはあまり成功していないと思われるものもあったが、文学作品をフランス語の授業に取り入れるにあたって、様々な創意工夫が可能であると知ることができたことは、大きな収穫であった。

また、このモジュールでは、各受講者が自国の作家をフランス語で紹介する時間が設けられた（紹介する作家はフランス語に翻訳されていることという条件が課された）。スーダンの作家 Tayeb Salih、トルコの作家 Orhan Pamuk、モロッコの作家 Fouad Laroui についての発表をそれぞれ聞くことができた。私は中上健次についてフランス語で簡単な紹介をした。他国の文学・文化にも貪欲に関心を持つ講師の姿が印象的であった。

おわりに

最後に、この場を借りて、日本フランス語フランス文学会、日本フランス語教育学会、そしてフランス大使館の担当者の方々に、心より御礼を申し上げたい。どうもありがとうございました。

報告 5

フランス・ブザンソン夏季スタージュ報告書

中田浩司

はじめに

2018年7月30日から8月8日まで、フランス東部に位置するブザンソンのフランシュ・コンテ大学応用言語センターCLA (Université de Franche-Comté Centre de linguistique appliquée)において2週間のフランス語教員養成スタージュを受けた。以下、受講した授業について報告する。

研修プログラムについて

研修生は、研修期間中、月曜日から金曜日まで8時30分から15時まで3つの module を受講する必要がある。さらに15時30分からは、forum (1回で完結) ないし atelier (3回で完結) に参加しなければならない。前者については、最低3つ、後者については最低1つを受講することがスタージュ修了の条件とされている。また、module, forum, atelier はそれぞれ90分で行われる。

module については、出国前にオンライン上で登録することが可能であるが、現地での登録、変更も可能である。オンライン上では、簡潔な講義内容が閲覧でき、関心を引きそうな module はすぐに定員を満たす可能性があるため、なるべく早めに登録しておくことをおすすめする。forum, atelier については現地で登録する必要がある。参加者の定員が制限されている forum, atelier あるいは期間中に急遽追加される forum もあるため、研修の本部から示される情報を随時確認しておく必要がある。なお、1日の流れは以下の通りである。

8h30-10h Module de formation 1

10h-10h30 Pause

10h30-12h Module de formation 2

12h-13h30 Pause

13h30-15h Module de formation 3

15h-15h30 Pause

15h-17h Forum /atelier

以下に報告者が受講した Module, Forum および atelier の概要を示す。

Module

(1) La société et la culture françaises aujourd'hui : Jean-Marie Frisa

フランスの地理、社会、政治制度、教育制度に関する講義であった。報告者は、主にフランス哲学を専門にしてきたので、これまでフランスの地理的特徴、人口動態、工業や産業の特色などに関する知識を持ち合わせていなかった。また、自発的にそのような分野について、研究書などを紐解く機会がなかったため、この講義には、大いなる関心をもって臨んだ。

この講義では、フランス語教員として授業を進めて行くうえで扱うことが必要不可欠なフランス文化、地理、社会の側面に関する知識を得ることができた。教育法を修得するというより、むしろ教員の知識を深めることに重点を置いており、個人的には有意義なものであった。

(2)Phonétique et pratiques de classe : Jean-Christophe Delbende, Mariella Vitorou

フランス語の発音、発音記号、イントネーションなどを一通り復習し、ついで参加者(国籍はカザフスタン、スペイン、トルコ、スーダン、スリランカ、モロッコ、チュニジアそして日本)がどのような発音上の間違いを犯しているかを細かく分析し、指摘し合った。また、発音矯正に際して、口の動きを説明しながら矯正する **Correction articulatoire** ではなく、**Correction verbo-tonale** と呼ばれる、身体によって音の高さ、低さ、緊張度などを表現しながら矯正していく方法を学んだ。最終日には、CLA の留学生に対して、発音矯正の実習を行った。

(3)Méthodologie du FOS : Marie Thierion

特定目的のためのフランス語の教授法を学ぶ講義であった。「文法」、「発音」などに加えて「読む」、「聞く」、「話す」、「書く」ことを学ぶ一般的なフランス語の学習とは違って、ある職業にとって必要不可欠なフランス語を学習するために、教師としてどのような授業づくりができるかを学んだ。大学では、このような授業を担当することはないかもしれないが、この講義の中で学んだ、「学習者のニーズの分析」「学習者の能力評価方法」「指導案の執筆方法」などは、一般的なフランス語の授業においても応用できるものであった。

最終的には、自分が、FOS の授業を行うことを想定して、そのための指導案を作成した。本講義は、非常に少人数(5名)だったので、教員と研修生の距離が近く、指導案の作成時には、ほぼ個別指導という形で指導を受けることができ、非常に満足している。

Forum

(1) La voix, une amie à protéger : Mariella Vitorou

フランス語教師にして歌手でもある Mariella Vitorou 氏によるアトリエ。

まず、口、喉、声帯、呼吸器に関する解剖学的な知識を学んだ後、発声方法を実践形式で学んだ。また、**Je vole** というミシェル・サルドゥが歌い、**La famille Béliet** という映画(邦題は、『エール』)の中で歌われている曲を課題曲として練習し、最終的に参加者全員で合唱した。

Atelier

(1) Apprendre et enseigner avec TV5 Monde

TV5 Monde が提供している教育用のサイトの紹介から始まり、それを用いた授業実践例の紹介、また学習者が自学自習できるような教材の紹介があった。報告者が教えている日本の大学生(特に初学者)にとってはやや難しい内容かもしれないが、レベルに応じた教材が用意されているので、講義内で適宜紹介していきたいと思った。

(2) Victor Hugo, l'homme et ses combats, d'hier à aujourd'hui

Victor Hugo の生家を訪問し、学芸員の方から彼の生涯、交友関係、作品、死刑制度に対する考えを解説していただいた。

おわりに

今回、フランスは酷暑というにふさわしい天候で、連日35度を超える気温のなか、また冷房設備が完備されていないなか、体力的に非常に厳しい研修であった。なかには、体調を壊した研修生がいたが、お互いに励まし合いながら2週間を乗り切った。

今回の研修では、スリランカ、モロッコ、チュニジア、ルーマニア、スペイン、トルコ、韓国、カザフスタン、ウクライナ、コソボ、スーダン、セネガル、トーゴ、リビア、アイルランド、ドイツなどの国々の先生方と知己を得ることができた。彼らとは、休み時間に各国の研修生と自国のフランス語教育の現状、教育制度について紹介しあい、知見を深めることができた。

個人的な話になるが、報告者は学部生だった頃、同じくブザンソンのCLAで研修を受けた。その際、演劇の授業でJean-Christophe Delbende氏の講義を受けたが、今回15年ぶりに氏の講義を受け、旧交を温めることができた。

今回の研修で学んだことを少しでもいかし、日本におけるフランス語教育の振興と発展に貢献できればと思う。

最後になりましたが、研修生として報告者を派遣していただいた在日本国フランス大使館、日本フランス語フランス文学会、フランス語教育学会に御礼申し上げます。また、在日本国フランス大使館文化部の萩尾英理子様には、今回の研修に際し、非常にお世話になりました。ありがとうございました。

報告6

夏季スタージュ報告書

西村晶絵

1. 概要

8月13日から24日にかけてブザンソンのCLAにおいて行われたスタージュに参加した。各授業は90分で、朝8時半から午後15時（forumやatelierに参加の場合は17時）まで行われる。参加者の国籍は、スーダン（10人）、スリランカ（3人）、モロッコ（1人）、アイルランド（1人）、アンゴラ（1人）、エジプト（1人）、トーゴ（1人）、トルコ（1人）、スペイン（1人）、南アフリカ（1人）、そして日本（4人）であった。そのうち、スーダンとスリランカ、アイルランドのスタジエールは7月31日から参加していた。

2. 授業構成・登録方法

このスタージュでは、毎日三つのmoduleに参加する。また、2週間のうち三つ以上のforumか、3回で完結するatelierに参加することが求められる。Moduleの登録は、CLAのサイトから事前に行うか、現地で行う。人気の授業は定員が埋まってしまうことがあるので、事前に登録した方が選択肢は多い。私は7月上旬に登録したが、この時点でも定員が埋まっているものがあつた。サイト上ではmoduleの変更も可能。現地でも、スタージュが始まって2日目までは変更できた。Forumとatelierは、それが行われる週の月曜日10時から現地で登録する。

・moduleについて

私が参加した各moduleは次の通り。

①Apprendre et enseigner la grammaire autrement (担当：Caroline Langer)

文法事項の学習においては、一般に、学習者が受け身となる授業が行われがちであるが、このmoduleでは、学習者の側が主体的に参加し、その中で学習事項が自然と見つけられるような教授方法が検討された。例えば、複合過去や近接未来などの各時制の学習においては、ゲームやシャンソンなどを活用することで、学習者の理解が定着しやすい授業が可能となる。文法の授業に取り入れ得る様々なアクティビティを知ることができた。最終週では、こうしたアクティビティを活用しながら、10分ほどの模擬授業を行うことが求められた。各スタジエールたちは、それぞれの国の事情に即した授業を試みており、文化面でも大変興味深い時間となった。

②Favoriser les pratiques créatives et ludiques en classe de FLE (担当 : Régine Llorca)

Régine の考案したゲームやリズムを用いつつ、実際に体を動かしながらフランス語を身に付ける手法を学んだ。学習者が相互にやり取りをしながらフランス語のフレーズやイントネーションを自然に身に付けられるような工夫がなされていた。これらは、学習者同士、あるいは学習者と教師の間での密なインタラクションが可能な環境においては有効な方法であるように思われる。だがその一方で、一クラスが 30, 40 人になることもある日本の大学でのフランス語教育においては、そのまま適用することは難しい部分もあるように感じた。工夫して取り入れることで、耳や体を能動的に使ったアクティブな授業が展開可能となるだろう。

③Pédagogie de l'orale : Favoriser les interactions en classe de FLE (担当 : Marie Thierion)

様々なアクティビティを通して、授業内に多様なインタラクションを生み出そうとする点においては上記二つの module と同じである。だがこの module は、そうしたアクティビティを導入するにあたり、それを有効に活用するために教師が気を配るべき事柄を身に付けることを意図したものであった。各セッションでは、まず Marie が紹介するアクティビティを実際にスタジエールが実践する。次に、このアクティビティがどのレベルの学習者を対象としているのか、その目的は何か、それを達成させるためにはどのような指示を出さなければいけないか、ということを考察する。それを踏まえ、同様のアクティビティをグループで考案し、そのレベル、目的、指示を作成する。こうした訓練を繰り返し行ったことで、今後授業内でアクティビティを取り入れる際には、明確な目標設定と的確な指示のもと、学習者にとってより効果的なフランス語習得に繋がられるように思う。

・ Forum について

次の 4 つの forum に参加した。

①Découvrir la médiathèque du CLA et ses ressources

CLA のメディアテックの使い方やデータベースの活用方法についてのレクチャーを受けた。日本からもアクセス可能なデータベースは、今後も活用したい。

②Découvrir le Fonds Régional d'Art Contemporain de Franche-Comté

美術館の学芸員の方に美術館の建物や館内の作品を紹介いただいた。隈研吾による美術館の建物は、古い工場の一部を利用したものであり、木というブザンソンに豊かな材料を多用しながら作られているという話が印象的であった。

③Victor Hugo, l'homme et ses combats, d'hier aujourd'hui

ユゴーの生家の中に作られ、主に彼の辿った政治的な足取りを紹介した資料館の見学ツアーであった。生家の向かい側にはかつてノディエも住んでいたとのことで、ブザンソンと文学者たちの関わりについても知ることができた。

④Parcours découverte : Besançon, une ville plaine de surprise !

ブザンソンに特有の建築方法や注目すべき建造物についての詳しい解説を受けながら、街中を散策した。建造物や建築様式を通じて、ブザンソンの歴史や文化の奥深さを知ることができた。

3. アクティビティ

・ Le Haut-Doubs バスツアー

フランス大使館のご厚意で、こちらのツアーに参加することができた。Château de Joux ではガイドによる説明のもと、紆余曲折を経た城の歴史について学んだ。ドゥー川のクルーズでは、対岸にスイスを眺めることができ、フランシュ・コンテ地方とスイスとの距離的な近さを実感することができた。文化や歴史といった面からも非常に興味深いツアーであった。

・ La soirée internationale

我々日本人グループは、時代劇風の寸劇と歌で参加した。準備に十分な時間を割くことができなかったが、ダンスや歌を披露するグループが多い中、唯一劇をやったというインパクトもあったのか、観客の受けは良かった。結果的に楽しい時間となり、とても良い思い出になった。

・ その他

滞在中はその他にも様々なアクティビティが催されていた。また CLA のスタジエールは、時の博物館やユゴーの家など、何度でも無料で訪れることができる。

4. 宿泊施設

滞在した Zénitude は、スタージュが行われる大学から歩いて 15 分ほどの距離にある。ブザンソンに到着した日曜日の午後は 14 時半からしかチェックインできず、隣のホテルのレストランで時間を潰した。

清掃は週に一回で、自室で出たゴミは各自が集積所に捨てる。二つコンロのキッチンと冷蔵庫、電子レンジが備え付けとなっている。スーパーは町の中心部にいくつかあり、日曜日でも 13 時頃までは開いていた。

共用部分に洗濯と乾燥機が一台ずつ設置されており、8 時から 20 時頃まで使用可能。ただし、乾燥機は乾きが悪いため、フロントで貸してもらえる扇風機も活用すると良いだろう。

5. 全体の感想

今回のスタージュは、他の国のスタジエールとの交流を通して、日本における外国語教育の特殊性やその難しさについて考える機会となった。また、国は違っても、教員としての共通の悩みや難しさがあることがわかった。

スーダンやスリランカといった、今まで知り合う機会のなかった国のスタジエールと交流することができ、その国や地域の文化や歴史、教育環境等について知ることができたのも、とても大きな経験であった。

同じ目的を持つスタジエールや、熱心な講師の方々と共に過ごした2週間は、かけがえのない時間となった。今後もこの経験を活かし、フランス語教育に貢献できるよう努めていきたい。最後に、このような機会を与えてくださったフランス大使館の方々や、日本フランス語フランス文学会、日本フランス語学会の先生方に深くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

報告 7

ブザンソン CLA 夏季研修報告

齋藤山人

ブザンソン CLA におけるフランス語教育スタージュに、2018 年 8 月 13 日から 24 日にかけて参加した。日本からの参加者はまずパリに集合して、スタージュ開始前日にブザンソンへと移動する。移動日が日曜だったためブザンソンのスーパーがほとんど閉まっており、到着後に日用品を買えなかったのは少し不便だったが（もし来年以降も同様な日程ならパリで予め買い物をしておくといいかもしれない）、アンスティチュ・フランセ、フランス大使館、キャンパス・フランスの方々にホテルや TGV の手配などをしていただいたおかげで、非常に快適な滞在生活を送ることができた。このような機会をいただいたことに改めて感謝申し上げたい。

スタージュ期間中はほとんどの授業が CLA ではなくフランシュ・コンテ大学のキャンパスで行われ、午前 2 コマ、午後 1 コマの「モジュール」を受講する。各国の教員が対等に議論するというコンセプトもあって、「講義」ではなく「モジュール」という言葉が用いられているが、内容としては大学の授業に近く、場合によっては外国人学生を対象としたフランス語授業のような様相を呈しているものもあった。モジュールの他、研修期間中に合計 3 コマ以上の「アトリエ」もしくは「フォーラム」にも参加しなければならない。アトリエやフォーラムには、ブザンソン市内の史跡巡りや現代美術館訪問、ヴィクトル・ユゴーの生家や「時の博物館」の訪問など、地域観光や文化紹介を目的としたものも選択肢として含まれている。私は①「リズムと身体運動を用いた音声教育」、②「異文化交流としてのフランス語教育」、③「オーラルをいかに発達させるか」の三つのモジュールを受講して、さらに「CLA メディアテック訪問」、「フランス語歌謡を用いた教育法」、「フランシュ・コンテ現代美術館訪問」、「ヴィクトル・ユゴー生家訪問」、「ブザンソン史跡探訪」などのフォーラムに参加した。①「リズムと身体運動を用いた音声教育」のモジュールは、身体感覚と発音の関係に重点をおいた興味深い内容だった。同じフランス語の単語でも、どのような感情表現を込めるかによって、アクセントの位置も変われば、発音自体も変わる。自分が学習者の立場で感じてきた（そして、恐らく現在の学生も感じているであろう）当惑に一定の説明が得られて、非常に貴重な経験だったと言える。③「オーラルをいかに発達させるか」は、フランス語で発話することへの苦手意識や緊張をどのように管理・解決するかというテーマが興味深かった。会話の際に感じられる困難を具体的にリストアップして、それに対して、普段自分がどのような解決を試みているのかを視覚化・客観化して認識することは、ある程度フランス語で会話した経験のある学習者に対して有効な学習方法であるように思われるが、工夫をすれば初学者に対しても応用することが可能かもしれない。詩の暗誦・朗唱を用いたオーラル教育というテーマも、文学や音楽を語学教育に応用する実践の一例として刺激的だった。②「異文化交流としてのフランス語教育」という主題は一見、語学学習の問題とあまり関係していないように見えるが、様々なことを考えさせられるモジュールだった。現在私の授業に参加してくれている学生の大半はフランス語圏で暮らした経験を持たないが、

日本の大学教育で用いられている教科書には現地で生活しなければニュアンスが理解しにくい例文も少なからず使われており、日本とフランスとの文化的な差異に全く触れずに授業を行うことは難しい。外国語教育には自国の文化的土壌を脱中心化する契機という側面が確かにあり、その可能性をいかに展開することができるのかという問題設定は非常に興味深かった。

今回の研修で、個々のモジュールの内容とは別に印象的だったのは、各国の教員が持っているフランス語の知識の偏りである。他国の研修生と会話する中で感じられたように、日本人の教員が持っているフランス語の知識はやはりどちらかというと「文学的 littéraire」であるらしい。例を挙げると、名詞の前に形容詞が置かれているときに不定冠詞 **des** を **de** に置き換えるという規則 (**des** petites carottes → **de** petites carottes) は、他国の研修生のほとんどが守っていなかった（というよりもその規則自体を認知していなかったという方が正しいかもしれない）。それはフランス人の講師も同様で、日本人研修生の言葉遣いは「文学的だ」とコメントされた際には驚きを禁じ得なかった。日本の大学のフランス語文法初級の授業で必ず教えられる内容が、外国のフランス語教育ではほとんど注意を向けられていないということには、このような機会でもなければまず気づかなかっただろう。もちろん、だからといって日本の教育環境で重視されるこのような知識を、単純に偏ったものとして断罪するわけではない。私たちが何気なく使う表現が、他国のフランス語教員たちに印象を残し、時として尊敬の眼差しを注がれるのも事実である。それをどう考えるかという話はさておき、今回の研修では、様々な局面で日本の（というよりは、私自身が知っている日本の）フランス語教育の偏りを肌で感じられて、それが何よりも豊かな経験だったように思う。当然と言えば当然かもしれないが、日本のフランス語教育における常識が、必ずしも他国のフランス語教育の常識であるとは限らない。安易な言い方を恐れずに言えば、語学教育に携わる教員は常に自らの中に「外国」を培っておく必要があるのではないだろうか。それは、単純にフランスで奨励されているフランス語教育のあり方を模範にすべきだということではない。私たちのフランス語教育に関する知識は、「外の」視点から眺めることで常に相対化されうるし、逆にまた、私たちの知識や方法に鑑みることで（フランスを含む）他国の教育のあり方も相対化されうるということである。

この研修の間に考え、感じたことをこれからも忘れることなく心の中に留めておきたい。そして最後に、この夏のひと時を共に過ごして、親しく対話してくれた各国の友人たちに心から感謝の言葉を贈りたい。